

三度目の失敗で池を吹き飛ばし、五度目の失敗で演習場の壁に亀裂を入れ、七度目の失敗で指導教官の眉毛を焦がした。

そして今日、私は八度目の召喚術に挑んでいる。

誰もいない自室。窓の外はとくに日が落ちて安物の燭台がひとつだけ。チョークで引いた線はもう三回描き直した。教本の図と見比べて、接続点の角度を確認して、それでもどこか歪んで見えるのはきつと私の目が疲れているせいだと思いたい。

明日の朝までに下級水精霊の召喚を成功させること。担当教官のグレイス先生が出した最後通牒。『次の昇格試験に落ちたら退学勧告を出す』とはつきり言われた顔を思い出すと胃の底が冷たく縮む。

魔法使いになる事以外に私には何もない。

故郷の村に帰っても働き口はなく、親戚の家に転がり込む当てもなく、学院の奨学生という肩書きだけで生きてきた十九年間のその肩書きが剥がれたら何が残るのか。考えたくないから考えない。考える代わりに毎朝召喚陣を描き直す。今夜もそうしている。それだけが私の取り柄だから。深く息を吸い込んで詠唱を始めた。

教本通りの韻律。教本通りの魔力供給量。声が震えないように喉の奥に力を込めて、ゆっくりと、丁寧に。

召喚陣が淡く光り始める。青白い燐光が線をなぞるように走り接続点のひとつひとつに灯が宿る。ここまではいつも上手くいく。問題はこの先。魔力の供給を安定させたまま陣の回路を完成させる最後の一節。

集中しろ。抑えろ。流しすぎるな。自分に言い聞かせながら最終節に入る。その瞬間、身体の奥から魔力が溢れた。いつもこうだ。蛇口を開いたら水が噴き出すように最後の一押しで制御が崩れる。細い水路に大河の水量を流し込むような感覚。陣の回路が悲鳴を上げるのがわかる。線が白熱し、接続点が火花を散らし、描いた図形そのものが膨れ上がるように変形していく。

止められない。また失敗する。そう思った次の瞬間、部屋が闇に吞まれた。

燭台の炎が掻き消え召喚陣の光すら一度すべて沈んだ後に、床から噴き上がったのは青白い光ではなく深い深い紫紺の奔流だった。見たことのない色。教本のどこにも載っていない底の知れない暗さを湛えた光が天井まで立ち昇り、

部屋の空気そのものが重く変質する。

息が詰まった。肺の中の空気が粘度を持ったかのように呼吸のたびに抵抗がある。光の柱が収束していく。人の形に。

長身の輪郭が紫紺の中に浮かび上がり、細部が削り出されるように明瞭になっていく。赤い双眸が、私ではなく足元の召喚陣をじっと見下ろしていた。その唇がわずかに動く。

「……何だ、これ」

私に向けた言葉ではなかった。床の召喚陣をその目が舐めるように辿っている。接続点を一つずつ、回路の流れを一筋ずつ。まるで論文を査読する学者のようなあの値踏みするような視線。

数秒の沈黙。それから男はかすかに口角を持ち上げた。笑みとも嘲りともつかない曖昧な表情。

「滅茶苦茶だな」

それだけ言っただけでようやく視線が私に向いた。その鋭い目に射抜かれた途端、背筋を氷の指で撫でられたような悪寒が走る。

「ガキか」

低い声。感情の読めない平坦な呟き。

けれどその直後男の目がわずかに細まった。何かを見定めるように、私の身体の輪郭をなぞるのではなくもつと奥、皮膚の下、骨の髄、魔力の流れそのものを透かし見るような視線。片方の眉がかすかに持ち上がる。

私は声が出なかった。

下級水精靈を呼ぶはずだった。チョークで描いた安っぽい陣で掌に乗るくらい小さな精靈を教本通りに。それなのに目の前にいるのは教本のどの頁にも載っていない存在。人間の形をしているけれど纏っている空氣の質がまるで違う。部屋の中にいるのにこの人の周囲だけ重力が歪んでいくような圧。

「あ、あの」

「黙れ。いま考えてる」

遮られた。男は再び足元の召喚陣を見下ろしている。長い指が顎に添えられ赤い目が回路の歪みを追っている。

「陣の構成が歪んでやがる。帰還回路が繋がってねえ」

「え」

「聞こえなかったか？ お前が描いたこの陣、帰りの道が

塞がってんだよ。オレはここから出られねえ」

血の気が引いた。この男は見るからに上位存在の悪魔。しかも帰還不能。学院の規則以前に、これは魔法使いとして最悪の事故に分類される。

「な、直します。直しますから」

「当たり前だ」

男は不機嫌そうに舌を打って部屋の壁際まで歩くと、そのまま背中を預けて床に座り込んだ。長い脚を投げ出し、腕を組み、目を閉じる。

「さっさとやれ。推定どのくらいかかる」

「……数時間、たぶん」

「たぶんじゃねえよ。まあいい。待ってやる」

暴れない。怒鳴りもしない。不機嫌ではあるけれどそれ

だけ。上位の存在が下位の術者の失敗に付き合わされてた壁にもたれて待っている。その余裕が逆に怖い。怒る価値すらないと思われる気がする。何故だか悲しい。

震える指で修復用の筆を取り召喚陣の検証を始める。どこから歪んだのかどの接続点が書き換わったのか。一つずつ確認しながら正しい回路に描き直していく作業。地道で根気がいる。

チクタク。十分、二十分。壁際の男は微動だにしない。目を閉じたまままるで石像のように静かに座っている。時おり微かに鼻を鳴らすのは溜息なのか、それとも。

三十分が過ぎた頃だった。

「そこ」

突然声が降ってきた。目を開けた悪魔の瞳が私の手元を指

している。

「そこの接続、位相が半音ズレてる」

「え？」

「右から三番目の結節点。お前いま右回りに魔力流したろ。逆だ逆。お前の属性なら左回りじゃねえと通らねえよ」

何を言われているのかすぐには理解が追いつかなかった。魔力の流し方に右回りも左回りもない。教本ではすべて標準の右回りで統一されているはずで、だからこそ私はずつとそう。

「……左回り？」

「見りゃわかる」

男が顎で私の身体を示した。

「お前の魔力、色が標準と逆に回ってる。右回りの回路に

左回りの魔力を流し込みやそりや暴発して当然だ」

止まったかと思った。心臓が。

「誰も言わなかったのか」

その問いが何よりも深く刺さった。

何人もの指導教官にたらい回しにされた。その度に『魔力制御が未熟』『基礎練習が足りない』『集中力の問題』と言われ続けた。私もそう思っていた。才能がないのだと。毎朝召喚陣を描き直しながら今日こそは上手くいくと祈って、また失敗して、やっぱり私には無理なのかもしれないと思いかけてそれでも翌朝筆を取る。そういう日々を何年も。

それが、属性の特異性。私が下手だったんじゃない。回し方が最初から逆だったとは。

「教本通りにやりや暴発して当然だ、って……じゃあ、私がずっと」

声が震えて続かなかった。

視界が滲む。泣くな。泣くな、こんなところで。初対面の、しかも自分が召喚してしまった悪魔の前で泣くなんて。でも喉の奥がきつく締まって、鼻の奥がつんと熱くなつて、もう駄目だと思った時、男が盛大に顔を背けた。

「泣くなよ。面倒くせえ」

声は素っ気ない。壁に背を預けたままあからさまに私から視線を外している。気まずそうに、と形容するのが一番近い。人ではないものが人間の小娘の涙にたじろいでいる。そのちぐはぐさが少しだけ可笑しかった。

涙は止められなかったけれど声を漏らすのだけは堪えた。

しばらく沈黙が続く。私がようやく袖で目元を拭い終えた頃、男がぼそりと呟いた。

「……逆回転の修正詠唱がある。教えてやるから続きやれ」
振り向くと男はもう目を閉じていた。けれど、その唇が短い詠唱の一節を紡ぎ出すのを私は一言も聞き漏らすまいと耳を澄ませた。

触媒が尽きたのは作業が半分を過ぎた頃だった。

修復に使う銀粉の瓶が空になり代用できる素材も手元がない。こんな夜更けに学院の備品庫は施錠されているから街の夜間営業の素材店まで買いに出るしかない。

「すみません、少し買い出しに」

「ああ」

男が立ち上がった。私が怪訝な顔を見ると赤い目がこちらを見下ろす。

「召喚陣の効果範囲から出られねえんだよ、普通は。だが」
男は足元の陣を一瞥した。

「お前の陣、雑なくせに妙なところで規模だけはデカいな。……どこまで行ける？」

試すようにに一步、二歩と部屋の外へ踏み出していく。廊下を抜け、階段を降り、学生寮の玄関口。男はそれでも平然と立っていた。

「街の素材店くらいまでなら余裕だ。行くぞ」

「え、一緒に来るんですか」

「選択肢がねえだろ。お前の陣に繋がれてんだから」

深夜の石畳を二人で歩く。

男は外見を最低限だけ変えていた。けれど完全ではない。すれ違う夜更かしの通行人が無意識に男を避ける。道の反対側へ自然に逸れていく足取り。角の酒場から出てきた男たちがこちらを見た瞬間に笑い声を飲み込んで黙る。路地裏で眠っていた野良猫が彼の足音だけで跳ね起きて闇に消えた。

露店の護符が男が近づくと微かに光った。薄い蛍のような淡い発光。店主は気づいていない。でも私には見えた。

この人は人間にとっての異物なのだ。どれほど人の形を模していても世界そのものが彼を拒んでいる。空気が、光が、生き物が、石畳に刻まれた古い護符が。男本人は気にしていなかった。あるいはもう慣れすぎて何も感じない。そのどちらかだろうと思った。

退屈な街だ。魔力の匂いが薄い。道も建物も、すれ違う人間共も、みな等しく鈍い灰色をしている。オレの目にはこの世界の魔力は全て色として映る。人間の魔力は大抵が灰に近い白、時おり淡い青や緑が混じる程度で見るべきものなど何もない。

女が店の中で銀粉を選んでゐる。壁にもたれて待つ以外にすることもなく夜空を見上げていた時だった。背後から酒臭い気配がひとつ。

ふらつく足取りで店先に立つ女に近づいていく男の姿がオレの視界の端に映った。酔漢。魔力はほぼ皆無、ただの一般人。伸ばされかけた手が女の肩に届くかどうかという距離。

面倒だな。視線だけを向けた。酔漢の足が止まる。こちらを振り向いた目とオレの目が合った。

一瞬だった。おそらく一秒にも満たない。オレの擬態は視覚的には完全に近い。だが見られているという認識が生じた瞬間人間の原始的な本能は擬態の奥にあるものを感じ取る。網膜に映っているのは人間の男の姿でも、脳の深部、

爬虫類の脳と呼ばれる古い領域がそれを否定する。

酔漢の顔から血の気が引くのが見えた。瞳孔が限界まで開き喉の奥から引き攣ったような音が漏れる。そのまま二歩、三歩と後退り、角を曲がって消えた。

走り去る足音が聞こえる。しばらくは酒を断つだろう。壁にもたれ直して空を見上げた。つまらない夜だ。女が店から出てきた。銀粉の瓶を抱えてきよろきよろとあたりを見回してからオレの方を見る。

「何かあった？」

「何も」

嘘ではない。何も起きていない。オレが何もさせなかっただけだ。

帰り道、私はふと気になって訊いた。

「人間の街、うるさかった？」

男は少し歩いてから答えた。

「別に。ただ、お前らは魔力の匂いが薄い」

何でもないことのように言っただけで黙った。

言葉にされなかったものがある、と感じたのは直感だった。『お前らは』の中に私は含まれていたのかいなかったのか。でも訊けなかった。訊いたところで答えてくれる気もなかった。

夜風が吹いて隣を歩く男の袖が微かに揺れた。人間よりわずかに高い体温が風に乗ってほんの少しだけ伝わってく

る。不思議と恐怖は薄れていた。

召喚陣の修復が八割方終わった頃には窓の外が白み始めていた。

銀粉で描き直した回路は男に教わった逆回転の補正を反映させたものになっている。最初に描いた陣とは接続の方向がいくつも違う。歪みのせいで壊れた箇所を直しながら、同時に自分の魔力属性に合った形へ陣そのものを組み替えていく作業は想像以上に頭を使った。

けれど、不思議な手応えがあった。逆回転で魔力を流すと抵抗がない。今まで無理やりこじ開けていた水路を初め

て本来の流れに沿って歩いているような。壁際で目を閉じていた男が不意に口を開いた。

「契約しねえか」

「……え？」

「オレを帰す前に、ひとつ契約しねえかって話だ」

目を開けた赤い瞳が暁の薄明の中で鈍く光る。冗談の色はない。

「お前の魔力回転の補正。お前の体質に合った魔力の流し方をオレの力で身体に定着させてやる。今夜オレが口で教えた程度じゃ応急処置にもならねえ。根本からやり直すならもっと深いところに手を入れる必要がある」

「対価は」

「快樂の精気」

快樂。意味を理解するのに数秒かかった。

「人間の快樂、特に極限まで高められたものはオレたちにとって上質な糧になる」

男の声は淡々としていた。商取引の条件を読み上げるように事実だけを並べている。

「言っとくが、快樂つてのは曖昧なもんじゃねえ。お前の身体の芯から搾り出す。生半可な覚悟なら断れ」

脅してはないと直感的にわかった。この男は嘘をつかない。つけないのではなく、つかない。今夜一晩の短い付き合いでそれだけは確信していた。魔力の逆回転を教えてくれた時も、召喚陣の欠陥を指摘した時も、この男の言葉にはいつも剥き出しの事実だけがあった。

「お前の魔力の回転、自力で矯正するには何年かかる？」

その前に学院を追い出されるぞ」

強制はしていない。腕を組んだまま壁にもたれて赤い目でこちらを見ているだけ。選ぶのはお前だ、と。

退学は人生の終わり。文字通り私にとっては。魔法使いになること以外に私には何も。

頭の中で今までの失敗が走馬灯のように回った。吹き飛ばした池。亀裂の入った壁。焦げた眉毛。たらい回しにされた教官達の諦めた目。やっぱり私には無理なのかもしれないと何度も思って、それでも毎朝筆を取った朝。

あの朝の自分が今夜ここにいます。黙って考えた。一分、二分。長い沈黙を男は急かさなかった。

「やる」

声は、思ったよりもはつきり出た。

「お願いします」

男がほんの少しだけ目を細めた。笑みとは違ふ。けれども不機嫌でもない。何かを見極め終えた者の静かな表情。

「敬語はいらねえ」

そう言つて男は壁から背中を離しゆつくりと立ち上がった。

「じゃあ始めるぞ」

長い夜が終わる。もつと長い夜が始まる。

互いに自己紹介を済ませた後、事は始まつた。赤い目が私の身体を見ている。

けれどそれは女の身体を見る男の目ではなかった。透かし見ている。皮膚の下の筋肉を、筋肉の下、骨格を、骨格に沿って流れる魔力の回路を。その全てを一枚ずつ剥がすように見ている目。

「立ってろ。動くな」

短い指示。それだけで私の足が床に縫い止められた。

ナハトの右手が持ち上がる。長い指が私の鎖骨のすぐ下に触れた。服の上から。指先に微かな熱が宿っている。人間の体温より明らかに高い、けれど火傷するほどではない奇妙な温度。

「ここから魔力が分岐してる。左右に流れて、片方が心臓寄り、もう片方が腹の方。……この流れが詰まってる。普段からだるかったら」

淡々と告げながら、指が鎖骨の下を滑り胸の上縁をなぞった。服越しなのに触れた線に沿って微かな熱が沁み込んでくる。ナハトの魔力。指先から私の体内にほんの少しだけ注がれている感覚。

「あ……っ」

声が漏れたのは快感ではなく驚きだった。胸の上で滞っていた何かが温い水のようにほどけて流れ出す。ずっと肩に乗っていた重さが嘘のように消えて呼吸がひとつ深くなる。

「詰まりが抜けた。次」

施術。そう呼ぶのが正しい所作でナハトの手が腹部に移る。臍の少し上。服の上から掌を押し当ててじつと黙る。魔力の流れを読んでいるのだともうわかっていた。

「ここにも溜まってる。魔力が鬱滞して澱んでる、相当長いことだな。ここを流してやると楽になる」

掌から熱が浸透する。今度はさっきよりも深い、身体の芯に手を突っ込まれるような感覚。骨盤のあたりが内側からじわりと温まって重苦しかった下腹部の鈍い圧迫感が溶けていく。

「あ、ふ……っ」

身体がびくりと震えた。ナハトの手が止まる。その目が初めて作業対象ではなく反応する生き物として私を見た。

「ここ、感じるのか」

問いかけではなく確認。ナハトの目が一瞬だけ細まり、何かを計算するように虚空を見てから再び私に焦点を合わせた。

「魔力の結節点と感覚の集中点が重なってる。……合理的だな、お前の身体」

褒められているのか品定めされているのかわからない。ただ、あの目に映っている自分の解像度が恐ろしく高いことだけが伝わってくる。私が何を感じているか、どこが反応しているか、その一つひとつが魔力の色と波として彼の目にはすべて見えている。隠せるものが何もない。

「服、脱がすぞ」

許可ではなく通告。返事を待たずにナハトの指が私のローブの留め具に触れ上から順に外していく。慣れた手つきではない。人間の衣服に対する馴染みのなさが金具を探る指先のわずかな躊躇いに透けて見える。それでも構造を理解するのは一瞬で、三つの留め具が外れるとローブが肩から

滑り落ちた。

下に着ていたのは薄い肌着と下穿き。学生寮の私室で作業していたから大した格好ではない。ナハトの視線が肌着越しの胸の膨らみを一瞥しすぐに下腹部へ移る。見ているのは胸の形ではなくそこを走る魔力の回路。

「肌着も邪魔だ」

「じ、自分で……」

「好きにしろ。早くしろ」

震える手で肌着を脱いだ。冷たい夜明け前の空気が素肌に触れて腕が無意識に胸を隠す。ナハトはそれを見て鼻を鳴らした。

「隠すな。見えなくなる」

魔力の流れがな。という意味だと頭では理解している。

けれど裸の胸を晒したまま赤い目に見つめられていると理屈とは別の羞恥が肌を粟立たせる。

ナハトの指が露わになった左の胸に触れた。

乳房の丸みに沿って下から持ち上げるように掌が滑る。肌に直接触れたナハトの手は服越しの時よりもずっと熱い。指の腹が乳首の手前で止まりその周囲を円を描くようになぞった。

「んっ……」

「ここにも結節点がある。表層に近いから感度が高い。

……反応が素直だな」

乳首に触れてすらいらないのにその周囲を撫でられるだけで身体が反応する。ナハトの指先から微細な魔力が浸透してくる度に触れられた箇所感覚が鋭くなっていく。普段

なら何も感じないはずの肌が指の腹の紋様まで感じ取れるほどに。

「お前の魔力、いま薄い桃色だ。快感を覚えると色が変わるんだな」

淡々と報告される自分の反応。恥ずかしい。けれど恥ずかしいと感じていることすらきつとあの赤い目には色として映っている。

「下も脱げ」

膝が震えていた。けれどここで怯んだら始まらない。契約すると自分で決めた。覚悟はしたはずだと唇を噛んで下穿きに手をかける。布が太腿を滑り落ちて足首に溜まった時、夜明けの冷気が最も無防備な場所を撫でた。

ナハトの視線が真っ直ぐに私の下肢に向けられる。

「……ここが一番、魔力の密度が高い」

低い声が私の股の間を見据えて言う。

「ここから精気を引き出す。一番効率がいい」

効率。そう、この男にとってはいくまで効率の話。最も魔力の密度が高い場所から最も上質な精気を引き出す。それだけの話。なのに私の身体はその視線だけで熱くなっていた。見られている。一番見られたくない場所を人間ではない存在に。魔力の色として丸ごと読み取られている。

「座れ。床でいい。脚を開け」

指示に従うしかなかった。冷たい床に腰を下ろし膝を立てる。開け、と言われてもすぐには動けない。太腿がぴたりと閉じたまま小刻みに震える。ナハトが私の前に膝をつき、片手で右の膝を掴んだ。

「力抜け。痛くはしねえ」

有無を言わず脚が押し広げられる。冷たい空気が秘所に触れた瞬間反射的に声が上がった。

「あっ……」

「……もう濡れてるな」

事実だった。ナハトの視線が開かれた私の秘所をじっと見下ろしている。最も恥ずかしい場所を凝視している。

「お前のおまんこ、魔力が一番濃い。内側から光って見えるくらいだ」

ナハトの右手の人差し指がゆっくりと伸びた。最初に触れたのは太腿の内側。膝に近い位置から指の背でするすると肌を辿り、徐々に中心へ近づいてくる。触れている面積はわずかなのに、ナハトの指先から沁み出す魔力が行く先々

の感覚を増幅させてなぞられた跡が熱い線となって残る。内腿を上り詰めた指が陰裂のすぐ脇で止まった。

「んんっ……」

「焦るなよ。回路を確認してる」

指の腹が外陰部の輪郭をゆっくりとなぞる。大陰唇の丸みに沿って上から下へ。触れ方は軽い。けれど通常の何倍にも増幅された感覚がその軽い接触を鮮烈な刺激に変えている。ナハトの指が通った場所からじわりと蜜が滲み出してくるのが自分でもわかった。

「魔力が指に吸いついてくる。……飢えてたのか、ここ」
返事なんてできない。ナハトの指が大陰唇を割って小陰唇の薄い襞に触れた瞬間、腰がびくんと跳ねた。

「あ あっ♡」

「いい反応だ。ここの粘膜、魔力の吸収率が異常に高い。触れた分だけ全部飲み込んでやがる」

指先が小陰唇の間を滑り、蜜に濡れた襞を上へ辿っていく。その行き着く先にあるものを私の身体は本能的にわかっていた。怖い。けれど逃げられない。逃げたくない。どちらの感情が本当なのかもう区別がつかない。指先が陰核の包皮に触れた。

「ここだ」

ナハトの声が低く落ちる。

「一番魔力の密度が高い結節点。ここから精気を引き出す」
包皮の上から指の腹でそっと圧をかけられる。ぐり♡、と。

「ひっ……あ♡」

声が裏返った。包皮越しなのに増幅された感覚がそれを薄い布一枚分の隔たりにまで縮めている。ナハトの指先から注がれる熱い魔力が包皮を透過して直接陰核に届くような錯覚。

ナハトの指が微かに動く。包皮の上から陰核の位置と大きさを探るように、力加減を変えながら数回ゆっくりと押し撫でる。

「小さいな。だが密度は高い。包皮の厚さはこのくらいか……直接の方が効率がいいがまずは反応を見る」

ぞくり。とした。この男は本当に私の身体を回路図として読んでいる。陰核の大きさも包皮の厚さもすべて魔力伝導率の計算材料。なのに、その計算高さがもたらす愛撫が恐ろしいほどの確に私の快感を射抜いてくる。

包皮越しの刺激が数度繰り返される。そのたびに指圧が微妙に変わる。強く、弱く、円を描いて、縦になぞって。ナハトの目は私の顔ではなく指先を見つめていたが不意に私の全身に視線を走らせた。

「いま、お前の中の魔力が赤くなった」

告げる声は変わらず平坦で。

「さっきまで桃色だったのがいまは赤。ここを触ると赤が濃くなる」

くる♡と包皮の上から陰核を小さく転がされて。

「ああっ♡♡」

「……ここが好きなんだな」

好き。その言葉に身体が勝手に反応する。好きとか嫌いとかそういう問題じゃない。ナハトの指が触れるたびに頭

の中が白く灼けて何も考えられなくなるだけ。

「直接触る。動くなよ」

告げると同時にナハトの左手の指が包皮の端に添えられ、そつと上に押し退けた。保護を失った陰核が夜明けの空気に晒される。小さな、けれど今は充血して膨らんだ敏感な突起。

「んっ……！♡」

空気に触れただけで声が出た。増幅された感覚が露出させられたというそれだけの事実を強烈な刺激に変換する。ナハトの右手の人差し指が露わになった陰核に直接触れた。指の腹の温度。人間より高い熱が剥き出しの粘膜にじかに伝わる。触れた点から魔力が注ぎ込まれ、感覚の増幅がさらに一段階跳ね上がる。

「あ、あ、ああっ♡♡」

「力加減はこのくらいか。もう少し弱い方がいいのか……ここだな。この圧」

指先の力が髪の毛一本分ほど緩められた。その微調整が痛みと快感の境界線を正確に快感の側へ振り切る。呼吸が壊れた。吸って吐くという単純な動作の順番がわからなくなつて、喘ぎまじりの息が唇の間から零れ続ける。

「ひう……っ、あっ、ナハ……っ♡」

「お前が声出すたびに魔力の色が弾ける。声、我慢しないでいいぞ。その方が波形が綺麗だ」

我慢しなくていいと言われて我慢できるわけがなかった。ナハトの指が陰核の先端を小さく弾くたびに腰がびくんと跳ね、円を描くようになぞられると太腿が震え、ぐり♡♡

と押し込まれると腹の底から甘い痺れがせり上がってくる。
「もう飽和してんぞ」

ナハトの声。冷静な観察者の声。

「まだ指一本なのに、お前のおまんここんなに簡単に蕩けるのか」

指が陰核から離れ下方へ滑った。膣口のまわりを一周するように蜜を拭い、濡れた指先を私の目の前に翳す。

「見ろ。この量。お前の身体、オレの魔力を受け入れる気満々だな」

糸を引く透明な粘液がナハトの長い指と指の間に橋を架けている。自分の身体から出たものを見せつけられる羞恥。目を逸らそうとした瞬間ナハトの左手が顎を掴んで戻した。
「逸らすな」

赤い目が至近距離で私を射抜く。

「お前が何を感じてるかオレには全部視えてる。隠しても無駄だ」

逃げ場がない。この男の前では何もかもが裸。身体だけじゃない。感覚も快感も恥ずかしいという感情すら、魔力の色と波形としてすべて読み取られている。濡れた指先が再び陰核に戻った。今度は二本。人差し指と中指で陰核を軽く挟み、転がすように擦り上げる。

「あああ♡♡♡だめ、それ、っよ……っ♡」

「強い？ お前の魔力は喜んでるぞ。いまの色真っ赤だ。嘘つきだな、お前の口は。身体の方が正直だ」

ずるい。こんなのずるい。身体が正直なのは当たり前で、だって感覚が何倍にも増幅されていて、ナハトの指が触れ

るたびに頭の奥で何かが弾けて、もう何も考えられない。考えたくない。

快感が積み上がっていく。腹の底に熱い塊が凝縮されてどんどん密度を増していく。心臓の鼓動が耳の中で暴れて視界の端が明滅し始める。

「あ♡あ♡あ♡♡♡やば、なにか、くる……っ♡」

「来るぞ。そのまま逆らうな。全部出せ」

ナハトの指が陰核の先端を的確に捉え、ぐり♡♡♡と押し潰すように圧をかけた。

「あああ♡♡♡」

足の指先から頭頂部まで快感の電流が一気に駆け抜けていく。腹の奥で凝縮されていた熱い塊が破裂して、その破片が身体中の神経を焼きながら散っていく。太腿が痙攣し、

膾が何もないのに収縮を繰り返し、ナハトの指がまだ陰核に触れている、その接点から余韻の波が途切れなく押し寄せてくる。

呼吸ができない。声にならない声が喉の奥から漏れて目の前が涙で滲んだ。ナハトの指がようやく陰核から離れた。余韻に震える私を見下ろしてナハトは低く呟く。

「……いい波形だ」

絶頂の直後。全身がまだ痙攣している。意識すらまともに戻っていない。その瞬間に投げかけられた感想がそれ。いい波形。

学術的な評価。私が今まさに人生で一番激しい快楽に貫かれた、その事実に対する感想が波形の良し悪し。怖い。この人は本当に人間ではない。人間の形をしているだけの

全く別の存在。私の絶頂を上質な魔力の噴出としか見ていない。

なのに身体はまだ熱いまま。ナハトの指が離れた陰核がひく♡ひく♡と名残を惜しむように脈打っている事が自分であってしまふ。余韻が引く前だった。ナハトの指が何の予告もなく陰核に戻った。

「ひっ……！！♡ ま、待つ……」

「待たねえよ。一回で終わりだと思ったか？」

絶頂の直後。感覚が剥き出しになった陰核に再びナハトの指が触れる。増幅された過敏さがさっきまでの比ではなかった。触れられた瞬間に腰が跳ね、反射的に脚を閉じようとした太腿をナハトの左手が押さえ込む。

「逃げるな。まだ精気が足りねえ」

「む、無理、いま触られたら……っ♡」

「無理じゃねえ。お前の回路はまだ開いてる。むしろ今が一番通りがいい。絶頂の直後は魔力の流れが滞りなく循環するんだよ。……オレの魔力も入りやすくなってる」

ナハトの指先からさっきよりも濃い魔力が注がれるのがわかった。陰核を通じて体内に沁み込んでくるそれは熱い。液体のような粘り気を帯びた熱が陰核から恥骨の裏を辿って子宮のあたりまで降りていく。

「あ、うあ……っ♡なに、なにこれ、中が……熱い♡」

「魔力を流してる。お前の回路を通して内側から感度を上げてる。次はさっきより深いところから来るぞ」

予告が怖い。ナハトの予告はいつも正確に当たる。

指が陰核を弄び始める。さっきと同じ二本指で挟むよう

な動きだが力加減が変わっていた。絶頂後の過敏な状態に合わせて圧を落としている。それなのに、感覚は先ほどの倍以上。注ぎ込まれた魔力が感度の天井を引き上げてしまつて、優しく触れられることが容赦のない刺激になる。

「ひ、う、あっ♡あっ……♡♡♡だめっ、もう、すぐっ……♡」

「早いな。まだ十秒も経つてねえぞ……お前のおまんこ、イった後の方が感じるのか。面白え回路してるな」

面白いで片付けないでほしい。でもそう言い返す余裕なんてどこにもなくて、ナハトの指が陰核の先端をつるり♡と撫でるたびに腹の奥がきゅうつ♡と痙攣して、もう全身がナハトの指先ひとつに支配されている。

ぐちゅ♡♡と音がした。自分の身体から出た音だと気づ

くの一秒かかった。溢れた蜜が陰核の周りに溜まっていた。ナハトの指が動くたびに湿った水音を立てる。静かな部屋に響くそれが耳に入る度に羞恥で頭がおかしくなりそうになる。

「いい音だ。さつきより蜜の量が増えてる。粘度も高い。身体がオレの魔力に馴染んできた証拠だ」

「そんなこと、言わないでっ……♡」

「事実を言ってるだけだ。お前が恥ずかしがると魔力の色が赤と紫の間で揺れる。それも綺麗だぞ」

綺麗。この人は一体何を見ているの。私が死にそうなほど恥ずかしい思いをしているのにその羞恥すら魔力の色として観賞している。でもその声が嫌ではなかった。冷たいのにどこか心地いい。ナハトの声は低くて、淡々としてい

て、感情が見えないのに耳に触れると身体の奥が甘く疼く。二本の指が陰核を挟んだまま上下に擦り始めた。ぬるぬる♡と蜜に塗れた指の腹が包皮ごと陰核を扱くような動き。じゅぷ♡じゅぷ♡♡と規則正しい水音が刻まれる。

「あっ♡ああっ♡ああああっ♡♡♡」
「来るか？」

「くるっ♡くるくる♡♡もう……っ♡♡♡」

「行け。全部出せ」

二度目の絶頂が下腹部の奥底から噴き上がった。

「あああああ♡♡♡」

一度目とは質が違う。もっと深い、もっと暗い場所から引きずり出されたような快楽。身体の内側で何かが振じ切れるような感覚とそれが切れた瞬間にほとばしる熱の奔流。

膣がびくびく♡と痙攣し、腰が自分の意思とは無関係に跳ねてナハトの手に縋りつくように身体が丸まる。

「は、あ、あ、あ……♡」

息ができない。胸が上下するたびにひゅうひゅうと喉が鳴る。涙が頬を伝っている。いつから泣いていたのかわからない。ナハトの赤い目がその涙を見ていた。

「二回目。もっと深い波が来たな。……予想通りだ。お前の回路、一回いくたびに次のリミッターが外れる構造になっている。三回目はもっと来るぞ」

三回目。その言葉で心臓が縮んだ。

「ま、待って。少しだけ、少しだけ休ませ……」

「お前が休んでる間に回路が閉じる。今開いてるうちに通さないと意味がねえ」

冷徹な回答。ナハトの指が再び陰核を捉えた。

「いやあっ♡」

いや、じゃない。いやじゃないことは自分の身体が一番わかってる。いやと言いながら腰が押し付けるように動いてナハトの指に陰核を擦りつけている。惨めで恥ずかしくて、でも止められない。

三度目の愛撫は今までで一番丁寧だった。陰核の先端を指の腹でそっと包み、円を描くように、ゆっくりとゆっくりと。急がない。けれど止めない。一定のリズムで、一定の圧で、逃げ場のない快楽を積み上げていく。

「お前の魔力、さっきから波打ってる。寄せては返す波みたいだ。行きたいのに行けない、その境界線で揺れてる」
「う、あ、ああ……♡」

「綺麗な色だ。赤と白の間を行ったり来たりしてる。もう少しだな。もう少しで白に振り切れる」

予告する声が遠くに聞こえた。頭の中がぐちゃぐちゃで、ナハトの声だけが妙に透き通って届く。指の動きがほんの少しだけ速くなった。くちゅ♡くちゅ♡♡と蜜を含んだ音が速度を上げる。

「行け」

その一言で、身体が弾けた。

「あ、あああああ♡♡♡」

三度目。

視界が真っ白に焼き切れた。声が声にならず、喉の奥から引き攣った悲鳴のようなものが絞り出される。全身の筋肉が同時に硬直してぶるぶると細かく震えた後に一気に弛

緩する。腰から下の感覚が消えた。消えたのに快感だけが残っていて体の芯を何度も何度も波が通り抜けていく。泣いていた。声を上げて泣いていた。快感なのか苦痛なのかもう区別がつかない涙が頬を洗い、顎を伝い、鎖骨の窪みに溜まる。嗚咽が止められない。身体中が震えて、歯の根が合わなくて、何かにしがみつきたいのに手が動かない。

ナハトが私の涙を見ていた。けれどその目は同情でも心配でもない光を湛えていた。涙が頬を伝う軌跡を辿り、それから一瞬虚空に焦点を合わせるような目をする。何かを感じ知っている目。

「泣いた方が魔力が流れるのかお前」
呟いた声に微かな驚きが滲んでいた。今夜初めて聞く、

予想外のものに遭遇した時の響き。

「涙に魔力が混じってる。泣く前より循環の速度が上がってやがる……お前の身体、本当に変わった構造してるな」
そこまで言ってからナハトの左手が私の頬に伸びた。長い指が涙に触れる。骨ばった掌が頬に添えられて乱暴に、ごしり。と涙を拭った。丁寧さのかけらもない粗雑な手つき。けれど。

「壊れやしねえよ。オレが加減してる」

声は素っ気なかった。いつもの感情の见えない低い声。けれど頬に添えた手は動かなかった。

拭い終わった後もナハトの掌はそのまま私の頬に留まっていた。温かい。人間より少し高い体温。手の大きさも指の長さも人間のそれとは微妙に違う。でもこの掌の温度は

怖くなかった。

二秒、三秒。小さな沈黙。沈黙の中でナハトの親指が私の頬骨の上を一度だけ、そっと撫でた。ほとんど無意識の動作に見えた。本人が自覚しているかも怪しい指先のほんの微かな動き。この悪魔にとつての精一杯の配慮。

その手がゆっくりと離れて次の愛撫に移る間際。ほんの一瞬だけ、ナハトの赤い目が揺れたのを涙で滲んだ視界の端で私は見た。

頬から離れたナハトの手が私の両膝の内側に添えられた。ぐ、と押し広げられる。三度の絶頂を経た身体は抵抗する力をほとんど失っていてされるがままに脚が開いていく。晒された秘所がひく♡ひく♡と収縮を繰り返しているのが空気の動きで自分でもわかった。

ナハトが黒いスーツのベルトに手をかけている。金具の外れる硬質な音。布擦れの音。それだけで心臓が跳ねた。今から何が始まるのか頭では理解している。理解しているのに、身体が勝手に震える。恐怖ではない。もつと根源的な本能の予感。

ナハトの性器が露わになった時息を呑んだ。